新刊紹介

◆『佐伯四国札所めぐり』

―平成十三年より現地研修の成果―

編集・佐伯史談会

平成十四年刊　B5判　三四頁

本書は平成十三年に佐伯史談会が四回実施した「佐伯四国札所めぐり」の研修成果を冊子にまとめたものである。同会の霊場めぐりは、第一回目は上浦町の夏井・浅海井(三月八日)、第二回目は佐伯市の晞干・古江・狩生・宮の内・指夫・代後(五月十八日)、第三回目は佐伯市の笹良目・折戸・中の内・戸穴・河内・海崎上区・中野東(九月二十一日)、最後の第四回目は弥生町の床木・横谷・一ノ瀬・大坂本畑・畑木・谷口(十一月二十日)の各地の霊場を訪ねている。

本書の構成をみると、序文(四国八十八ヶ所霊場の由来や大正六年〈一九一七〉に佐伯町の針灸師佐藤一哉によって開創されたことなどの解説、大分県内の主な霊場の紹介など)、仏像の種類と簡単な見分け方を紹介している。さらに、訪ねた霊場ごとに、霊場の名称・所在地・開山の時期・仏像・建造物と建築年代・境内の遺物・札所詠歌について詳細に解説している。

また、各霊場をカラー写真(二十二枚)で紹介して、親しみやすく、心の安らぎを覚える冊子となっており、史談会員に大好評である。本書は佐伯四国札所めぐりの際の必携書である。会員・一般の方々に一読をお勧めしたい。なお本書の編集は会員の林寅喜氏による。また、『佐伯四国札所めぐり』は、続編が発刊される予定である。(矢野)

◆郷土の歴史メモ（木立地区）

林　寅喜
（会員　佐伯市中の島）

平成十四年六月刊　A5判　二五頁

私は昭和六十二年頃から郷土史の研究を始めた。キッカケは戦没者名簿がないということを聞いて、これでは犠牲者に対し申し訳ないと思ったからである（私のクラスでも二人、十八歳で戦死した）。

そこで早速市の永年書庫を閲覧させてもらったが見当たらず福祉事務所にあることが分かった。しかし、全戦没者ではなかったため、後は聞き取りによって調査するより方法はなかった。

木立は昭和三十年、下堅田・青山と一緒に佐伯市に合併した。その際村で保管していた永年保存の書類はあらかた佐伯市の永年書庫に移されたものと認識していた。

ところが、引き続き歴代村長・助役・収入役・村議会員と調べかかったところ満足に残された書類はなく、未だに不明な部分が多い上、昭和四十九年に発行された市史にも、合併後の期間が短いためかあまり取り上げられていない。これが他町村のように独自に発行していたら、調べる必要もなかったと思う。

そうしたことから私の郷土史研究も多面にわたり、これまで書いた本は四冊になる。平成三年には郷土史クラブが発足し、変わった視点から見た郷土史研究も始まり、昨年は『十年の歩み』とその『基礎資料』の二冊を発行することが出来た。しかし、郷土史はとかく説明文が長いため飽かれて敬遠される。そこで分かりやすく簡明にしたのがこの本で、平成七年発行の市史『佐伯市現代二十年のあゆみ』を参考にして、箇条書きに改め短文化した。最も内容はこれまで発行した本の中から抜粋して編集したものであるが、新たに加えた事項もある。

掲載の内容は左の通り。

・地勢　・人口と戸数　・昔の道路交通
・今の主要縦貫道　・村方制度　・郷と枝郷
・村高　・年貢とその種類　・流通貨幣
・木立の田畑一反に課せられた基準収穫量
・年貢高の決め方　・年貢の割付け　・五人組
・圃場整備の実態　・各種団体の設立　・木立郵便局
・小中学校の沿革　・木立駐在所　・神社一覧
・庵と寺一覧　・市木地蔵　・祭礼と行事
・記念碑　・戦没者　・その他の歴史

（林）

◆『善教寺物語』

さとう　たくみ著

平成十四年四月刊　A5判　三二頁

本書はさとうたくみ氏（佐伯史談会員）が善教寺第十六代住職桑門豪氏に執筆を依頼されてまとめた善教寺の歴史である。

本書の構成をみると、佐伯荘と佐伯氏、佐伯惟教に仕えた衛藤氏、佐伯氏・家臣団の去就、浄土真宗の伝播、善教寺の中興開基、高政の母妙西尼、石川玄蕃頭と善教寺、キリシタンと宗門改め、古市村にて大船をつくる、佐伯藩中興の英主高慶、瀬太夫の妻変死事件、城下町の大火、善教寺十三世・小栗布岳の十三の領域に分け記述されている。

著者は中世史に造詣が深い郷土史家であるため、中世をはじめ、近世・近代と各時代の背景をふまえ、善教寺の歴史を見事に、読者に分かりやすい表現で記述している。また、各ページには切り絵作家として有名な著者でなければ描けない切り絵が本文の下段にさし絵として入れられ、楽しい読み物になっている。

善教寺住職の桑門豪氏は善教寺の歴史の執筆を佐藤氏に依頼した理由を次のように「発刊にあたって」の中で述べている。すなわち、「善教寺は創立当初は古市地区栗元にありましたが、現在の城下に移転し、当初より五百余年が過ぎ、その歴史の記憶が人々の間に薄れてきています。そこで、佐伯史談会の著名な会員であります池船区在住の善教寺門徒であります佐藤巧氏に特にお願いしました」と語っている。

著者は善教寺草創期の謎に挑戦し、衛藤氏や古市村などについて詳述している。特に開基・開山期の記録が少ないなかで、苦労して善教寺の歴史の解明に取り組んでいる。

また、著者は現地調査を実施し、善教寺の旧跡は古市村栗元が有力であることや、大内梅林にある善教寺の石塔は六字名号を刻んだ何かの供養塔であろうと推測している。

本書の巻末には多くの参考文献もあげられ、読者の郷土史の学習に役立つ。本書を読むと、善教寺の歴史を通して佐伯の歴史を学ぶこともできるので、佐伯史談会員や一般の人々にも一読をお勧めしたい。（矢野）

川名のルーツ

◆長淵川　合流点にこの地名がある。淵となり瀬となって流れるところであり、これも文字通り長く続く淵に起因するとみていい。

◆市園川　市園はかつて佐伯城下と延岡城下を結ぶ街道を通っていたところ。おそらく市に起源するものであろう。蔵小野（くらおの）川の名もあった。

◆小川　北浦村の山奥から発し、北川町熊田で北川に入る。小は美称、愛称。

◆鐙川　大分県境を経て宮崎県側に流れ込んだところに鐙の地名。川岸に崖地が発達している。アブに洞穴の意があるので、それに起源するのか。よくわからない。

◆田代川　川岸の台地に田代の集落。田を開いたところ。つまり新田。

◆桑原川　河谷の小平地に桑ノ原集落がある。桑とみるよりは、山の際、側、崖地を示すクワの当て字とみた方がいい。上流に藤河内（ふじがわち）渓谷がある。

（『日本全河川ルーツ大辞典』）